

「八・一五」の政治神話

天野 恵一

また、八月十五日がやってくる。私たちは毎年、この日は首相閣僚らの靖国神社参拝と政府主催で天皇参加の「全国戦没者追悼式」に抗議する行動をつみあげてきている。だから、「八・一五」についての論議は長く持続しているわけだが、「この日」の問題について、もっとも集中的に熱心に討論したのは、敗戦五〇年の年であった。様々な運動のテーマに取り組む団体を横に結んで、「敗戦50年問題連絡会」なる運動体をつくりだし、一二〇日間に限定した活動を展開した。その「50年連」のニュース(50↓NEWS)の第一号(九五年四月一〇日)に、私は立ちあがりの時の論議を紹介する文章を書いている。まず、それ(「敗戦 八月十五日 侵略―キーワードをめぐる論議」)を引こう。

―まず、運動体の名称についてである。右派は「終戦五〇年国民運動」路線である。この「終戦」といい方には、人為的な責任の観点が入らない、なにか自然災害のごとく戦争をとらえる意識がにじんでいる。そして、それは侵略のあげくの敗戦という現実に目をふさぐため

のイデオロギー言語として、権力者に受容されてきた言葉である。他方、「戦後五〇年問題プロジェクト」、これが政府の「戦後処理」機構の名称である。「戦後」の方がそれなりにニュートラルな言葉であるとはいえよう。

私たちは、「戦後」でいくか「敗戦」でいくかを、少々論議することになった。私の提案は「敗戦」であった。別に「戦後」を使うことが誤りなどというわけではもちろんないが、この間、積極的に、侵略のゴールとしての敗戦(日本帝国主義の敗北)という意味をこめて、それを使おうという主旨であった。それは右派の「終戦」と政府の「戦後」に自覚的に対置する言葉として選択しようという意思にもとづくものであったのだ。これはスナナリ、「敗戦」と決定した。

もう一つは、一応のゴールを八月十五日にするか否かという問題である。五月三日を本格的なスタートして八月十五日がゴールなら約百日間である。(百日運動)というのはどうか。こういう提案がまず出た。これに対しては、以下のような主張が対置された。八月十五日は権

力者のいう「終戦記念日」であって、天皇の名による「終戦」が演出された日であるにすぎない。九月二日の米艦ミズリ号上で、降伏文書に日本代表が調印した、この日をゴールとするべきだ。国際法(国際社会)の常識も、この日であることを無視すべきではない。

こうした主張には、まず、こういう意見が飛び出した。実質的に戦闘行為がなくなった時ということ考えれば、九月以降だつて各地で散発的に戦闘は持続していたわけだから、九月二日にそんなにこだわる必要があるのだろうか。国際法上の論理をそんなに尊重しなくてもよいのではないか。

また以下のような別の角度からの反論もあった。

八月十五日は、かつては「終戦記念日」であったかもしれないが、この間の戦後の民衆運動の流れの中では、様々な運動体によって、別の位置づけをされて、その日は記憶されるようになってきているのではないか。たとえば反靖国運動や反天皇制運動のグループにとつては、政府の大臣・議員の靖国参拝や「戦没者追悼式典」に抗議する日であるし、反戦をテーマにする団体(人々)にとつては、不戦・非戦を誓う日になっている。だから、政府の意味づけにふりまわされて、八月十五日の多様な集まりの中に、私たちが

そして、玉音（詔書）の内容は「帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾スル」ためのもので「東亜の解放」のためのものだったと語り、植民地支配や侵略への反省などカケラもないものである。戦後はこのようにスタートした。

この政治神話づくりの延長線に現在の「全国戦没者追悼式典」があり小泉首相の靖国神社参拝があるのだ。そしてこういう動きを支持する人々の声の今日における拡大は、「天皇による終戦」（ありがたい「玉音」）神話にすぎた人々の倒錯心理が、今日も大きく延命している事実をつけている。

この権力とメディアによってつくられ続け常識として再生産されている倒錯心理にこそ、いたるところで私たちは対決していかなければならないのだ。

（あまの・やすかず、反天皇制運動連絡会）

Information

8月11日(金) 「靖国参拝抗議集会」 16:00～ 場所: 東京・首相官邸 19:00～20:00キャンドル行動開始集会 場所: 東京・弁護士会館 20:00 キャンドルデモ出発 弁護士会館から 主催: 平和の灯を! ヤスクニの闇へ キャンドル行動実行委員会 (四谷総合法律事務所気付 電話: 03-3358-9256)

8月12日(土)～8月15日(月) 「平和の灯を! ヤスクニの闇へ キャンドル行動」 場所、内容等は次の連絡先へお問い合わせを。主催: 平和の灯を! ヤスクニの闇へキャンドル行動実行委員会 (四谷総合法律事務所気付電話: 03-3358-9256)

8月14日(月) 13:30～ 市民の意見30・関西特別例会「『8・14』と『九条』」 場所: 大阪・弁天町市民学習センター7F、主催: 市民の意見30・関西連絡先: 0729-98-1113

8月14日(月) 18:00～ 「非戦を選ぶ演劇人の会 ピースリーディング 19」 場所: 新宿スペースゼロ、主催: 非戦を選ぶ演劇人の会、連絡先: 044-900-9931

8月15日(火) 13:00～16:30 「第42回8・15集会〈抵抗〉の文化をつくりだす」 場所: 東京・日本教育会館 3F大ホール、〈第1部〉「抵抗の文化をつくりだすために」〈第2部〉「戦争に向かう気分と平和を作る文化」〈第3部〉報告・交流会「実践としての市民文化」主催: 市民文化フォーラム、連絡先: 電話: 03-3609-7689/045-317-3325

8月15日(火) 13:00～17:00 「日本国憲法の過去・現在・未来」 場所: 江戸東京博物館1階会議室、①映画「日本国憲法」②講演・水島朝穂、主催: 日本戦没学生記念会(わだつみ会) 連絡先: 03-3269-8071

8月15日(火) 13:15開場/集会後デモ「小泉は靖国に行くな! 国家による『慰霊・追悼反対! 8・15集会とデモ』」 場所: 東京・全水道会館、主催: 同集会実行委員会 連絡先: 落合ボックス事務局 (電話: 090-3438-0263)

[現在開催中] 7月18日(土)～8月31日(木) 毎日 11:00～19:00 「岡本太郎大壁画『明日の神話』展示会」 場所: 東京・汐留 日本テレビプラザのゼロスタ広場 主催: (財) 岡本太郎記念芸術振興財団/日本テレビ放送網(株)

否定的に考えるべきではないのではないか。

こんなふうには、「八月十五日」をめぐる論議は展開された。――
運動のゴールについては「八月十五日」ではなく「五月二日」と決めて一二〇日運動となったところには記されている。

今から考えてみて、私は、この時点では権力者のつくりだした「八・一五」政治神話の持つ恐ろしさが十分に対象化されていなかったという印象を持つ。もちろん私たちは、この政治神話について、それなりに自覚的であった。その操作の具体的ケースについて私がリアルに知ったのは『週刊新潮』一九七四年五月七日号から翌年の四月一〇日号までに連載されたものをまとめた、加瀬英明『天皇家の戦い』（新潮社・一九七五年）によつてであった。

「玉音放送」による「終戦」が知らされた時の皇居前の風景が、このように描かれている。

「突然、中央にいた男が叫びはじめた。国民服を着ている。／『みなさん！ 天皇陛下に申し訳ありません！ おゆるしをお願いしましょう！ おゆるしを乞いましょう……』／あとは声にならない、見ると『朝日新聞』という腕章を巻いている。／帰る者は、ほとんどいない。

立っている者も、膝がくずれて、玉砂利の上にぬかずいてゆく。／激しい泣き声が高く、低く、波のように広場にわたっていった。／かつて明治天皇、大正天皇の病が重くなった時には、やはりここに群衆が集まった。玉砂利の上に座り、あるいは立って、平癒（へいゆ）を祈願した。それぞれ鉦（かね）をたたき、太鼓を打ち、鈴を振り、ほら貝を吹き、あるいは声を漕（か）らして、御平癒あらせ給えと祈つたのである。／しかし今日は、鉦も、太鼓も、ほら貝もなかった。人々は、ただ泣いた。そして叫び、涙声で「君が代」を歌った。／この光景を昭和二十年八月十五日の「朝日新聞」がどう描いているのか、読んでみよう。

二重橋の下に『玉砂利ふみしめつつ、宮城を拝し、ただ涙』という見出しが出ている。／『溢（あふ）れる涙、とめどなく流れ落ちる熱い涙、ああけふ昭和二十年八月十五日』と書き出して、記者は『歩を宮城前にとどめたそのとき、最早私は立つてはいられなかった。抑へてきた涙が、いまは堰（せき）もなく頬（ほ）を伝った。膝は崩れ折（をれ）て玉砂利に伏し、私は泣いた、声をあげて泣いた、しゃくり上げ、突き上げてくる悲しみに唇（くちびる）をかみ得ず、激しく泣いた』と筆を進めている。：

この新聞は、正午にはすでに刷りあが

って、玉音放送が終わったころには、もう地方や、都内の販売店へ積み出しが始められていた。地方によつては、朝刊が夕方になって配達された。この日だけは前日の閣議で、終戦の詔勅が放送されてから配達することに決まっていたのである。そこでこの記事はあらかじめ書かれた予定稿であつた（傍点引用者）。

戦争の最高責任者（加害者）に怒りをぶつけるのではなく、「申し訳ない」とゆるしをこう倒錯した心情を組織するために、権力とマスメディアは「予定稿」を書いた、そしてらほほヤラセ記事通りの事態が現出したのである。

加瀬の本の「あとがき」では、二重橋前で土下座している人々の映っている写真の人物が連絡をよこし、あれは十四日にとつた土下座やらせ写真であると証言していると書かれている。実は、この写真が『朝日新聞』のものではなく『同盟通信社』のものであることを明らかにしている佐藤卓己の『八月十五日の神話――終戦記念日のメディア』（ちくま新書・二〇〇〇年）は、八月十五日のマスコミは、やらせのポーズ写真が他にいくつも存在していることを明らかにしている。

「玉音」（天皇）に泣き崩れ、ゆるしをこう「国民的体験」は操作的につくられただけではない。人々はその操作に自発的にコミットしたのである。